特集

水と生きものの エデュテインメント

学びと癒しの水族館を創る

日本の水族館は諸説あるが1882年、恩賜上野動物園の一画に設置された観魚室「うおのぞき」が発祥とされる。循環ろ過装置もない淡水魚の展示施設だったという。日常に身を置きながら魚の生態を覗き見る。その施設名称から人々の水中世界に対する憧憬が伺える。
そして今、水族館は教育（education）と娯楽（entertainment）を包括し、楽しみながら学ぶエデュテインメント施設として定着しつつある。その数は世界に比して多く、水族館王国といわれることもある。更に、学びと娯楽を越えて新たな価値を創造しながら来館者の興味を刺激し続ける施設が求められるようになった。陸に海中、河床の世界を創造する。建設業界としてどう応えていくか。その可能性を探りながら水族館整備の現場に潜ってみた。

愛され続ける エデュテインメント施設

水族館プロデューサー
中村元氏

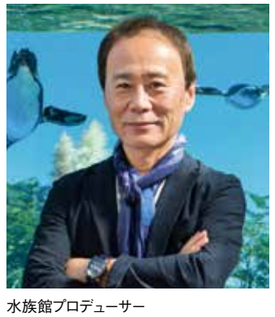
新江ノ島水族館。館内最大規模の「相模湾大水槽」

水族館は学びと娯楽の場であると同時に運営を継続するための仕掛けとして卓越した集客機能を有する必要がある。今求められている水族館の理想像とは、将来にわたって愛され続けるエデュテインメント施設とは。独自の発想をもって数々の水族館の再構築とプロモーションを手掛けてきた水族館プロデューサー中村元氏にお話を伺った。

生きものと自然環境を担う人を育む

—水族館のリニューアル、新設が各地で計画、実行されつつあります。現在の水族館のあり方、潮流についてどのようにお考えでしょうか。

博物館としての水族館が少なくなってきたように感じています。水族館は本来は博物館に位置付けられています。博物館の役割は社会教育を担うことですから、来館者に「本物」を見ていただくことが大前提。展示で嘘をついてはいけない。観賞を目的とした美しい水槽、つまりアクアリウムを整備することとは根本的に異なります。例えば美術館とギャラリーはどちらもそれぞれ目的を持って存在していますが、これを混同するようなことがあってはならないということです。



水族館プロデューサー
中村 元 *Hajime Nakamura*

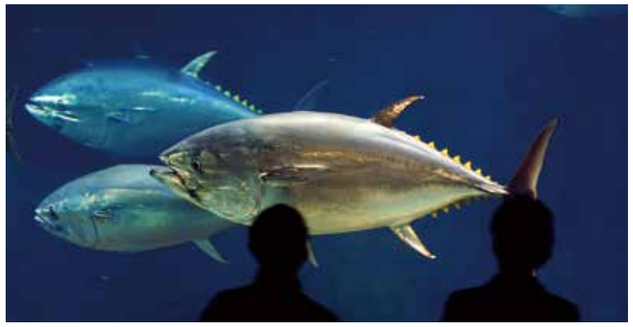
—水族館が実践すべき「社会教育」について教えてください。

教養やレクリエーションを通して精神を健全に保ち、社会を育てていくことだと考えています。水族館の展示物は生物たちの生命そのものです。ただ鑑賞するだけのためにこの命を供することは健全とはいえません。生きている生物を捕獲して、その命と向きあうことで我々は何をなすべきなのか、何を展示すべきなのか。それを真剣に考えたうえで運営者は整備を、来館者は世界を知り、楽しむことを求められているのではないでしょうか。

—中村さんはかつて「訪れた人々に意味のある影響を与えられる展示が理想」だと指摘されています。「意味のある影響」についてどのようにお考えですか。

展示されている生きものたちと自然環境の未来を担う人たちを増やすということです。飼育されているペンギンを見て「かわいい！」と感じるだけではなく、このペンギンの仲間たちが今まさに暮らしている南半球に想いを馳せる。その地の海洋汚染や温暖化の問題に少しでも目を向けられるようになれば、意味のある影響を与えたことになります。

例えば、葛西臨海水族園は世界で初めてマグロの群泳展示を実現しましたが、その雄姿を目にすると回転寿司で安価に食べることができるマグロの印象が変わってくるはずです。私たちはこの生きているマグロを何気なく食べているのだと。絶滅が危惧される生物に目を向け、意識を高めることは魚食民族の日本人としても大切なことです。そうした従前の意識を変えることができる展示が理想的だと考えています。



葛西臨海水族園のマグロ群泳展示

海中の「塊」をそのまま持ってくる

—一九八〇年に入社した鳥羽水族館では全国初の広報専任の企画室長に就任し、ラッコブームを巻き起こして集客二〇〇万人を達成しました。

意味のある影響を与えるためには、できるだけたくさんのお客さまに来館し、観賞していただくことが必要です。鳥羽水族館はファミリー層とほろ酔い気分の団体客しか来なかったのですが、ラッコがきっかけとなり多様なお客さまが押し寄せました。メディアの露出量も激増して客層がガラリと変わった。生物の命に触発されて自然環境に対する意識変革を主導するのはやはり大人です。ペンギンもいてゾウやキリンもいる動物園の方が子どもに人気もありますし、大人を呼べる水族館のあり方を考える契機になり

中村氏がプロデュースする施設で、活き活きとする生きものたち。（左はマリホ水族館。それ以外はサンシャイン水族館）

（P08-11写真提供：中村元氏）

マリンワールド

サンシャイン水族館

新江ノ島水族館

マリホ水族館

ました。それまで動物園や水族館に後ろ向きだった女性の共感も醸成して『デートができる水族館』を目指したのもその頃のことです。

―鳥羽水族館を退職後は水族館プロデューサーとして江の島水族館のリニューアルプロジェクトに携わり、「水塊」という新しいコンセプトを打ち出されました。

海に潜った時の感動をそのまま切り取って水槽に収めるという発想から生まれたのが「水塊展示」です。水中の光景を「塊」のまま建物のなかに持ってくるという展示方針です。

博物館を語る際に「展示物は情報である」という言い方があります。動物園では「動物」が情報。水族館の展示物は「水槽」。生きものを包含した水槽そのものを情報として展示する姿勢が重要だということです。海中の再現だけに拘泥すると擬岩だらけの水槽になってしまう。ダイバーが海中で体感する浮遊感、清涼感、命の躍動感を再現するために生物が生息できる環境を維持して擬岩の量は極力減らしました。

―しかし、中規模化、コンパクト化が進行する現在の水族館では巨大な水槽の設置は構造的に困難な面もあります。

制約があってもそれを逆手に取れば現実に近い海洋の展示は可能です。サンシャイン水族館のリニューアルでは、ホリゾント照明を水槽内で実現させることで奥行きを感じさせるラグーンを再現しました。ミュージカルの舞台装置から得た着想です。

サンシャイン水族館「ラグーン水槽」

『天空のペンギン』の水槽は壁を撤去して本物の空を借景することでペンギンが広くて青い海を飛んでいるように見せることができた。少し離れたところにある文化や分野にヒントはいくらでもあります。

―そうした柔軟で懐の深い発想が施設整備においても重要なのですね。

施設整備に当たっては本物の大自然を体験、体感できる施設であることをまず念頭に置くべきです。人と自然界との距離がますます大きくなるなか、その空気感を限りなくリアルに体験できるかどうかは重要なファクターになる。

私が水族館の館長や飼育係の方にアドバイスするのは、飼育者ではなく「展示者」になろうということ。来館者に野生生物が生きるフィールドをそのまま見ていただくのだから、北海道でも海外でも展示者自身が大自然の野生生物を実際に見る機会を持つことやそこで得た感動が大事です。設計者も可能ならばダイビングを経験してほしい。そうすれば水族館を構成するうえで最も大切なものが見えてくるはずです。「野生」を知っている人がやはり一番強いんです。

カスタマー起点で考える

―持続可能な水族館を運営、経営するために重要な視点は何ですか？

人を呼び込むためにはマーケティングの視点も重要です。大衆が求めていることをもっと深掘りするということです。例えば客層の変化。五〇年前は子ども連れのファミリー、二五年前からは若い方々も呼び込めるようになった。今は比較的時間に余裕のあるシニア層が目立っていて、これからますます増えますね。そうした来館者が何を求めているのか。シニア料金を設定している施設もあります。カスタマー起点で発想することも必要でしょう。運営側にはそうした視点が希薄なことも多い。ですから水族館プロデューサーという私の仕事が成り立っているともいえるかもしれませんね（笑）。

―水族館の整備には生きものが健全に飼育される環境づくり、運営者のコンセプト、来館者のニーズ、マーケティングの視点など多岐にわたって配慮、検討する必要があるということですね。

水族館を整備、リニューアルする際に大切なことは、建築物を建てようとするのではなく「展示物」を創ろうという意識です。更に展示物である水槽を見栄えやカッコよさ、カタチだけにこだわるのではなく、展示の実態や中身について常に想いを巡らせる必要があります。そのために、繰り返しになりますが大自然を実際に体感し、自然のフィールドを熟知している人とコラボレートする、視察時は来館者の視点で水槽の中を見るといった姿勢は必須です。

水槽の中ではあらゆるものが大気中とは違って見えます。見かけの距離感は三分の二になる、水槽の防水色や擬岩の塗装色は水中に入ると突然明るく変色する、といった色彩や光の屈折に関連する専門的な知識を持って設計の根拠とすることは当然のこと。そこから感動が生まれるということを念頭に運営者にアドバイスできる設計者はとても貴重な存在になります。

サンシャイン水族館「草原のペンギン」

動物の専門家ではない私が水族館プロデューサーとして仕事をさせていただいています。展示の意義、大自然の感動を知っている設計者、施工者であればその思考回路とものづくりの知見を駆使してこれまでになかった視点で水族館を創ることができるはずです。私もそうした意識を持った仲間たちと仕事をすることが心から楽しいと常日頃から感じています。

海とまち、生きものと人をつなぐ水族館

須磨海浜水族園／神戸須磨シーワールド
株式会社竹中工務店

神戸市民のシンボルをリニューアル

JR神戸線の須磨海浜公園駅から徒歩五分、住宅街を抜けると瀬戸内海の海岸が広がる。その海沿いに整備された海浜公園と水族館の再整備事業が佳境を迎えている。神戸市立須磨海浜水族園は市民から「スマスイ」と呼ばれ親しまれてきた。前身の須磨水族館の開業は一九五七年。一九八七年に水族園としてリニューアルされたが、開園から三〇年以上が経過し老朽化が否めない。立地する須磨海浜公園の開園はそれより昔、度々改修が行われてきたが昭和六十年代から園内はほぼ変わっておらず、市民ニーズを満たしているとは言い難い。市は民間の活力と資金を活用したPark-PFIのスキームを導入して、公園と水族園を一体的に再整備することとし、二〇二一年十一月に再整備工事に着手した。

須磨海岸に面した海浜公園は白砂青松の景勝地として名高い。水族園も神戸市民なら一度は訪れたことがある神戸市のシンボルだ。これを全面的にリニューアルする大型プロジェクト。再整備事業の意義について神戸市観光企画課の中川和樹係長に伺った。「かつては公園内に結婚式場や野球場もあり、水族園とともに市民に愛され続けてきた神戸市西部を代表するエリアです。一方、メリケンパークやハーバーランド、異人館といった有名な観光地が東部に集中していたため、西部地区の観光の新たなランドマークとなるよう、新しい水族館と公園を整備することになりました」。須磨海岸は海水浴場として夏季に賑わいを見せる。民間の運営手法を導入し、この一帯を年間を通じて活性化させることが再開発事業の大きな目的の一つだと中川係長は話す。

愛された水族園の記憶をつなぐ

再開発事業のコンセプトは「『つながる』海浜リゾートパーク」だ。地域コミュニティの生活の質を向上させると同時に瀬戸内全体を視野に入れた観光集客を狙いエリア全体の活性化を図る。「神戸須磨シーワールド」と名称も決まった水族館のテーマも「『つながる』エデュテインメント水族館」。オルカ（シャチ）スタディアム、ドルフィン（イルカ）スタディアム、アクアライブ（魚類・アシカ・ペンギン棟）の三棟で構成され、これを広場やブリッジでつなぐ。瀬戸内の自然と生態系、更には太平洋やサンゴ礁を再現し、アシカやペンギンの展示、西日本唯一のシャチのダイナミックなパフォーマンスが最大の目玉になる。「旧水族園時代も当時としては国内最大級、展示内容もトップレベルを走る施設でした。神戸須磨シーワールドも国内のみならず世界に誇ることのできる学びとレクリエーション、研究の拠点になることを願っています」と中川係長は抱負を語る。

一方で旧水族園は地域のシンボルでもあった。その施設が姿を消してしまうことを惜しむ声も寄せられたという。旧水族園の建物は巨大な三角屋根がランドマークになっていた。海に向かって屹立するその外観は市民の自慢でもあった。市はこの施設の記憶を留めようと策を練った。現在、ホームページ上で「須磨海浜水族園デジタルアーカイブ」を開設している。事前のアイデア募集には市民から「幼い頃に亡き父と行った水族園の写真が見たい」「いつまでも当時を想い返すことができる施策を」といった声が多数届いた。解体前に園内を高画質全方向のカメラで撮影し、VRで施設内を散策できるバーチャルツアーや、施設や公園を再現できるペーパークラフトのダウンロードなどを、アーカイブサイトで展開している。この紙製の模型が精緻を極めた力作だ。

ペーパークラフト（写真提供：神戸市）。

かつての水族園を超える施設に

旧水族園は単なる建物ではない。魚や海洋生物の生態を学び、自然の大切さを記憶に刻む縁（よすが）でもあった。「私自身も神戸で生まれ育ち、幼い頃には両親に連れて来てもらった施設です。愛着はとても強い。市民からも閉園を惜しむ声をいただきましたが、あわせて神戸須磨シーワールドに期待する声もいただいています。その期待に応えられるよう、かつての施設を超える水族館にしたいと切に願っています」と中川係長は回想しながらそう話してくれた。

イルカが舞いシャチが熱演する

現場では真新しい二棟のスタディアムがほぼ完成、アクアライブは既に生きものの飼育を開始していた。特に屋外スタディアムの複雑かつ開放的な形状が目を引く。設計と施工の特殊性について㈱竹中工務店の浜口邦夫総括作業所長はこう説明する。「イルカやシャチがジャンプした瞬間に観客の視線がどのよう

KOBE SUMA SEA WORLD

神戸須磨シーワールドはエンターテインメント施設としての観光拠点であると同時に調査研究機能も重視した水族館になる。世界を視野に神戸ならでは、須磨だからこその展示を目指していると中川係長は話す。

神戸市経済観光局観光企画課
係長
中川 和樹 *Kazuki Nakagawa*

ドルフィンスタディアム。

ンスを可能な限りライブ感をもって堪能できるよう計算しつくされているという。

設計を担った梶村健チーフアーキテクトは水族館設計についてこう語る。「展示と飼育、両面の機能を満たすことが大前提で、生きものたちが健康に過ごせることも社会的に求められています。千葉県の鴨川シーワールドの運営スタッフをはじめ、多くの専門家の方々と膝詰めで話し合い、課題を一つひとつクリアしてきました」。

水族館の設計に携わることはほとんどない。水族館と自然界を熟知した外部スタッフのアドバイス、かつての須磨海浜水族園の歴史、同社が手掛けた大阪市の海遊館をはじめとする水族館の知見などを総動員して、あらゆる角度から検討を重ねたという。黒河勝之作業所長はこう振り返る。「生きものを扱う建物。飼育員さんや各分野の専門家の方達が常に身近にいてくださって、意見やご指導をいただくことができました。ペンギンは二〇センチくらいの段差は越えづらいなど知らなかったことばかり。そうした意味では新たな発見に満ちた現場です」。

水族館はコンパクト化が主流になりつつあるが、神戸須磨シーワールドは広い敷地を活用した分棟構成だ。「展示スペースを巡る過程で周辺の松林や浜辺の海風を感じられる点が大きなコンセプト。接続が多く、屋根の防水も個別になるので施工は効率的とはいえませんが、自然を実感しながら生きものとつながるという目的は何としても実現したかった」と梶村氏は話す。浜谷朋之シニアチーフアーキテクトも「公園の中に三つのパビリオンが配置されている。これらを広場やブリッジによってつなぎ、連続性を保ちながらも、園地と建物を一つの景観として融合させたいという想いがありました」と説明してくれた。一帯を眺めると確かに市民に愛されてきた広大な海浜公園と独特のフォルムを持った旧水族園のイメージを壊すことなく継承することに成功している。

黒河作業所長もこう言葉をつなぐ。「ドルフィンスタディアムとアクアライブの間はブリッジでつないでいます。一般の来園者は国道の交差点からここをくぐって浜辺に出ることができる。海へのメインアクセスは地域の皆さんからの要望に沿ったものでとても喜ばれています」。

に動くのか、そのために屋根の角度はどうあるべきか、通常のスタディアムとは異なる視点での検討が必要になりました。アクアライブも含めて、生きもののダイナミックな躍動感を体感できる設計が、この水族館の前提になっています」。観客の視線は生きものの動きに合わせて垂直方向に移動する。客席の位置によっては見上げたり見下ろしたりすることにもなるが、そのパフォーマ

左から、田中信弥作業所長、浜口邦夫総括作業所長、黒河勝之作業所長。

左から、梶村健チーフアーキテクト、浜谷朋之シニアチーフアーキテクト。

オルカスタディアム。シャチやイルカのパフォーマンスエリアはスタディアムの形状を採用し床部材はプレキャスト化した。

水槽の背後にはろ過器などの装置群を集約した。「工場を整備したような感覚。客席からは見えないレイアウトに腐心しました」（浜谷氏）

「海岸に沿って並ぶ松林の7割を保全することが条件でした。伐採することが許されているのはあと数本でした。建物のレイアウトも松林を避けながら検討した。枝が足場に当たったり、ギリギリの状態で重機を入れたり。工夫しながらの施工でした」（浜口氏）

園地と水族館、自然界と生きものがつながるイメージ上の演出はこの施設の大きな特徴といえる。

神戸の新しいランドマーク

二棟のスタディアムの客席はそれぞれ巨大な鋼製の傘に覆われている。客席の前面にはシャチ、イルカがパフォーマンスを披露する満々と水を湛えたプール。その先は瀬戸内海の海原だ。「水族館は生きものファースト。水槽の水は瀬戸内海の海水。海底トンネルを掘削して四〇〇メートル近い沖合から水深一〇メートルの新鮮な海水を取水して館内に供給しています」と田中信弥作業所長が教えてくれた。

客席の下層階は水槽に面する壁に大きなアクリル窓が設けられ、ドルフィンスタディアムはホール、オルカスタディアムはレストランとして整備。休憩や食事をしながらイルカやシャチが回遊する様子を手が届きそうな距離で見ることができる。

国道から眺めたスタディアムは独特の存在感を放っていた。「屋根が複層している景観は実は『シャチやイルカが跳躍するイメージ』を表現している」と浜口総括作業所長が明らかにしてくれた。「設計図を見た時には正直ほんまにできるんかなと思いました。しかし、出来上がりを見てなるほどと思いました。新しいランドマークを造ることができた。自分でもようやったと自慢できます」と言って笑った。

神戸須磨シーワールドのオープンは二〇二四年六月の予定だ。海のエデュテインメント施設、神戸市西部エリアの新たなシンボルのデビューが間近に迫っている。

大都会の真ん中で自然界の癒しと気付きを

株式会社ユニホー
AOAO SAPPORO
佐藤工業株式会社

思い思いの時間をゆったりと過ごす

北海道随一の繁華街、札幌はすすきのの交差点から二〇〇㍍足らずの高層ビルの中に今年七月、水族館が誕生した。「AOAO SAPPORO（以下AOAO）」は最新鋭の都市型水族館だ。再開発事業で建設された地上二八階地下二階の「moyuk SAPPORO」の四階から六階に開業した。

エントランスは四階。ゲートを抜けると人工海水の製造装置が立ち並び、スタッフが飼料の調合や生物の健康管理などを行っている様子を目にすることになる。敢えてバックヤードを露出することで水族館の構造やスタッフの仕事に対する意欲を伝えている。

五階は生物たちの生態を観察するゾーン。水草が繁茂する四つのネイチャーアクアリウムと大小四三もの水槽で図鑑のページを繰る感覚で魚たちを見ることができる。休憩や書籍の閲覧ができるコワーキングスペースも設えられた。

六階ではAOAOのトップスター、ペンギンたちが待っている。軽食を提供するシロクマベーカリー&や、海の世界をデジタルアートで再現したスペースで思い思いの時間を過ごすことができる。

独特な形状の水槽や大型の海洋生物によるパフォーマンスはない。生きものの生態を解説するプレートに加えて水槽の横に置かれているのはその魚に因んだ童話や小説などの書籍。和名に「ウナギ」とつく魚の水槽の傍らには「蒲焼」の料理本があった。魚のありのままの姿に囲まれながらベンチに腰掛けたり、読書をしたり、ビールでのどを潤したり、ゆるゆると感性を開放してゆったりとした時間を過ごす。来館者の数だけこの水族館の価値が生まれる、館内はそんな自由さにあふれている。

散策するように自分のリズムで館内を巡る。

ペンギンの水槽の傍らには椅子とテーブル。彼らが水中を飛翔する様子を眺め、コーヒーやビールを楽しみながら癒しの時間を過ごす。

自然界の美しさ大切さに気付く

事業主である㈱ユニホーの各務善胤東京支店長はこう話す。「生きものたちが活き活きと泳いでいたり、水中で繁茂する水草が光合成をして酸素を放出していたり、そんな可能な限り自然界に近い光景を見ていただくことに専念しています。地球環境の美しさ、大切さを都会のビルの一画から発信したかった。そうしたコンセプトがこの施設の最大のテーマになっています」。

AOAOの運営を担う山内將生館長はかつて金融や不動産の専門家として企業に勤めたのち、同企業が立ち上げた水族館事業部に異動し、東京スカイツリーに併設されたすみだ水族館の館長として采配を振るった経験がある。もともと生きものが好きだった山内氏はその後独立、自社を立ち上げてAOAOの館長に就任した。施設の経営という側面からこの水族館に対する想いを聞いた。そもそも水族館とはエンターテインメント施設なのだろうか。「少し違うと思います。やはりエデュテインメント施設という言葉が最もふさわしい。従来の水族館はアシカやイルカなどを中心とした生きもののショーを見せ、その生きものの生態に興味を持ってもらう側面と、魚類や海洋生物の研究拠点という二つの側面がある業態でした。加えて、今は魚が泳ぎまわる姿に癒され、自然環境のすばらしさに気付き、学び、想いを馳せる、そんな身近な居心地のいい場所といったあり方も求められていると思います」。自然界に身を置くと人は心身ともに癒される。AOAOはリュックサックを背負い、登山靴を履いて出かけなくても都会の真ん中で自然を体感できる場を目指していると山内館長は話す。

確かに来館者の足取りはいい意味で緩慢、先を急ぐ様子はない。大人の癒しスポットという趣がある。一方で山内館長は少し目論見が外れたと苦笑しながらこう明かす。「子どもの数が少し少ないなと。大

生物だけではなく水草などの植生が生育する様子を見ることができる。

ペンギンたちが快適に過ごせるよう、季節や時間ごとに照明を調光している。飽きないように擬岩も定期的にレイアウトを変更できる仕様だ。「来館者ファーストと生物ファーストはイコールなので、とにかく生物たちが健康に暮らせるよう最大限の努力をしています」（山内館長）

株式会社ユニホー東京支店
支店長
各務 善胤 *Yoshitane Kagami*

AOAO SAPPORO
館長
山内 將生 *Masao Yamauchi*

人向けに水族館の魅力を伝えるというコンセプトは達成できましたが、今後は子どもたちの興味に訴えかけるPRを強化していきたいと考えています」。子どもたちにも十分楽しんでもらえる施設構成、企画内容になっているがPRが少し尖がり過ぎていたかもしれないと笑う。

ワンチームで制約を越える

実はAOAOの構想はmoyukSAPPOROの施工が始まった後に浮上した案件だった。再開発計画では五、六階での物販はできない。宿泊施設の誘致も検討されたがコロナ禍で断念、かねてから俎上に上がっていた水族館に白羽の矢が立つ。詳細なマーケティングを行い水族館の建設に踏み切った。大都会に水族館を開設するということは大きな挑戦だ。各務氏は遅々として進展しなかった再開発のシーズとして街の賑わいを誘発する起爆剤になると決断したという。「階下には銀行やショップが入る『水』との親和性は全くない構造ですが、可能な限り補強を施し計画を練った。施工者の佐藤工業㈱JV、設計者の㈱NTTファシリティーズや㈱プランテック、設備会社、デザイナー、そしてその飼育管理を委ねたおたる水族館といったすべての関係者が我々とワンチームとなってくれた。AOAOはその賜物といえます」と各務氏は振り返る。

山内館長も設計施工上のハードルが多い中で奔走する。合言葉は「制約を越えれば物事は面白くなる」だったとこう語る。「設計者、施工者はもちろん音響から照明、映像、空間デザインまで当代随一のスタッフが集結してくれた。制約をクリエイティブの糧に変換してセッションしながら心地よい音楽を奏でる、そんな工程を楽しむことができました」。

今後の目標は地域から愛される水族館の創造だ。各務氏はこう抱負を語る。「地元はもちろん日本全国から、海外からも訪れるすべての来館者を笑顔にする、そんな水族館に育てていきたい。長い取組みになると思います。トライアンドエラーを繰り返しながらチャレンジしていきます」。今後は北海道の産物を集めたマルシェなど多彩な企画を展開していくという。

「BLUE ROOM」では壁面いっぱいにデジタルアートを投影。音と映像が浮遊感を演出する。

水族館スタッフの情熱に応えたい

「建設途上の高層ビルの中に水族館を造る。しかも水族館に携わるのは初めてのことです。緊張感の連続でした」と語るのは水族館建設専任だった辻和快所長だ。高層ビルの建設が進むなか、九㍍近いアクリルパネルをはじめとする大型資材や七㍍の水槽、ろ過装置など大型の設備機器の搬入にはことさら腐心したとこう言葉を続ける。「本体工事サイドに外壁の施工を待ってもらってその開口から取り込んだ。タワークレーンを使ったこともありました。再開発計画の工事関係者が一体になっていたからこそ可能な工程だったと思います」。

水族館の生物へ淡水や人工海水を供給する設備関連の工事はそれぞれ専門の施工者の所掌だが、内装や資材の選択に当たっては耐久性や先々のメンテナンスに配慮した提案を積極的に行った。「私たちには建物を完璧に機能させる責任があります。館長やスタッフの方の生きものや施設に対する想いもとても熱く感じられた。生きもののためにここまでするのかと。その情熱に応えたいと水族館に関しては素人ですが、施工に関してできることはすべてやったという自負があります」と辻所長は話す。

普段あまりスポットを当てられない生きものたちの展示で興味を持ってもらえるか。実は少しだけ不安だったと山内館長は明かす。「杞憂でした。皆さんとてもつぶさに見ながら、ゆったりとした時間を過ごされている。お客さまの滞在時間が長い施設になりました。コワーキングスペース（写真上）で過ごす方も増えています」（山内館長）

アクリルパネル搬入状況（写真提供：佐藤工業㈱）

「すごいものを造ってしまった」

高層ビルの中間階で何百㌧の水を収容する。最も配慮したのは防水対策だった。マンションの浴槽やオフィスビルの配管廻りの防水とはわけが違う。緊張感がピークに達したのは水槽に注水した時だった。「注水前にやるべき事はすべてやったので漏れることはないと自信はあったのですが、内心はドキドキしていました。かつてない緊張感がありましたね」。

辻所長は取材時（十月下旬）の段階で来館者としてAOAOを訪れたことがないと苦笑する。三月末に引き渡しを果たし、オープンまでの準備期間は裏方として見守ってきたが、直前になって函館の現場に赴任した。時間をつくってぜひ足を運んでみたいとこう話す。「工事に没頭していた間はその注目度を意識したことはありませんでしたが、開館後に何気ない会話のなかでAOAOのことが話題になる。メディアにも頻繁に取り上げられて、今や誰もが知る水族館です。改めてすごいものを造ってしまったんだなと（笑）。今はこのプロジェクトに参加できたことを誇りに思っています」。

これまでにない特殊な施設だ。辻所長は思い入れがあるだけに、将来のことも気にかかる。「山内館長も話されていましたが漫然と運営していると飽きられてしまう、常にチャレンジしていかなければと。メンテナンスを含め、新たな施策を展開される時にはお声がけいただければ光栄です」と話してくれた。

AOAOのコンセプトは「生命のワンダー～みえないものがみえてくる～」。忘れがちな自然界のすばらしさを見せてくれると同時に、都市型水族館の新たなステージを提示してくれるに違いない。そのチャレンジに注目していきたい。

佐藤工業株式会社札幌支店
所長
辻 和快 *Kazuyoshi Tsuji*